
ハートロック魔法戦記

みい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートロック魔法戦記

【Nコード】

N0328W

【作者名】

みい

【あらすじ】

国立ハートロック魔法学園。

そこは全国から優秀生徒が通う魔法の有名エリート学校だった。

そんな学園とは無縁の田舎町。

雨の日に謎の男から渡された謎の封筒は、ハートロック魔法学園の入学許可証だった。

属性不明だということになぜ自分の元に入學許可証が来たのか疑問に思う魔眼。

田舎が嫌いで、大都会にあるハールシット魔法学園の入学の決定にテンションがあがるみたい。

5年前にハールシット魔法学園に入学した幼馴染に会えると張り切るテノー。

それぞれの思惑を胸に、3人はハールシット魔法学園へと入学する。

それは、これから始まる壮絶な陰謀の幕開けでもあった・・・

第一話 〈Overture of the sound of rain〉

国立ハートロック魔法学園。

誰でも魔法が使えるこの世界で、世界中から魔法の優等生が集まるいわば、エリートの中でもひとときわ一流な名門校である。

ここの学園のウリは、魔法の優等生なら男女老幼問わず誰でも入れること。

そして、ただ才能だけではなく努力をして優等生になっても、ハートロック魔法学園の入学の切符を手に入れられるかもしれないというところだ。

この学園に通うことは、この世界に住む人間なら誰だって憧れる事であった。

・・・そして、そんな華やかな国立学園とは無縁の、小さな名もない田舎町・・・

「それではおさらいしましょう。“魔器”とは何か？・・・ハイツ、みいさん。」

「はい、魔器とは、誰もが必ずしも持っている、その人物の魔力を具現化した武器のことです。魔器には2種類のパターンがあり、「武器系」と「能力系」があります。」

小さな田舎町の、小さな魔法学校。

教室には、今発言したみいと言う少女・・・名前はミィ・ロニーフアという・・・と、

その隣で頬杖をついてあくびをしている少年が一人。名前は紅刃魔眼。

そして、担任である女教師が1人。流石ド田舎だけあって人数が少ない。

「正解です。それでは、魔眼君。続きをどうぞ。」

「あっ、はい。・・・武器系は、その名のとおり剣や銃など殺傷能力を持った武器になります。これは、属性によって形や技が変化します。そして能力系は、その人物の身体に直接備え付けられる魔器のことで、身体能力やその人物自体の外見に影響を及ぼします。これは属性によって左右されないので、同じ能力の魔器を持つ人は多くいます。」

「そのとおり！お見事です！」

みいは幼馴染である魔眼の顔をちらりと見て、ウィンクをした。・・・正直、今のは机の下にあるみいのカンペを透視魔法で読んだだけなのだ。

ちなみにこの先生はゆるくて、魔力が生徒である2人よりも低い。そのため魔眼のカンニングに気づいていなかった。

魔眼はふうと胸をなでおろして、みいに向かってウィンクをする。2人は幼馴染。もはや親友のような付き合いといっても過言ではない。

生まれたときからこの町で、家も隣同士で、同じ時間を過ごして、一緒にこの小さな学校に入学した。

お互いに、人生をともにできる存在だった。

——放課後

どんよりとした鉛色の雲。

そこから大量に降ってくる大量の雨。

2人はいきなりの大雨に立ち往生していた。

「うっわー・・・うちのババアの予知魔法アテにならねえ。今日は雲ひとつない晴天だって高々と言ってたのに」

「うちも傘忘れたー・・・そんな気はしたけどそのとき晴れてたし「めんどろくさかった訳な」

昇降口で外を眺める。この大降りの中帰って言ったなら、たとえばどんなに家が近くたって一週間風邪で寝込むのは間違いない。

魔法でどうにか出来ないのか、と言いたい所だが、生憎2人はシールドの魔法は覚えていないし、天気を強制的に変える気象魔法は上級魔法だ。恐らく、この学校では卒業直前に習うものだろう。

「・・・ハートロック学園に通ってれば、こんな雨屁でもないのに。」

みいはぼそつと呟いた。

あの学園となれば、気象魔法など最初の最初に習得できるのだろう。シールドなんかもう基礎だ。

あそこに通えばもう傘の心配などしなくてすむのだ。

そのとき、傘を持った一人の人物が2人の目の前に茶化すように現れた。

「おーい、何やってんだお二人さん？wまさかこれからデート」「黙れ変態」

緑の傘に入る緑髪の少年。彼の名前はグリーン・テノール。通称テ

ノー。2人とは1つ年上だ。

「ちょ、だから俺は変態は変態でも変態剣士だっつーの！そこんこ間違いのないように！」

「間違いも何も変態なんだから一緒にしょ」

「ひでえ！；」

テノーはみいの辛辣な言葉にがつくりと肩を落とす。

しかしその直後、2人の様子をまじまじと見て言った。

「・・・お前ら、傘ないのか？」

「それが第一声であってほしかったよ。」

魔眼が皮肉たっぷりにいった。すると、テノーは笑いながら持っていた傘を差し出す。

「お前ら使えよ！」

「でもてのっちがずぶぬれだよ？いいの部活。」

「俺はこれがあるからな」

テノーは指で頭上を示し、それからすつと足元を示した。

すると、テノーの頭上から足元までを無色の空間がすっぽりと覆い、雨水を弾き飛ばした。

「ほらな？wシールドの魔法さw」

「くっそ上級生くそう！！」

高らかに笑うテノーは、その後2人に別れを言ってシールドの効果で切れる前に走って帰っていった。

そして2人も1つの相合傘で帰路に着いた。

この数時間後、3人の運命が大きく変わるのだと知らずに・・・

第二話 〈Turning point of the fate〉

「おかえり、魔眼。降られたでしょ？」

「・・・ああ。テノーに傘貸してもらって助かった。」

ここは魔眼の自宅。

緑の傘を傘たてに置いた。

みいを送り届けた後、傘は俺が持つておくことになった。

「そう。それはよかったわね。」

母は夕飯の支度をしながら言う。

「ところで、まだ属性わかんないの？」

「ああ。今日も属性の授業は自習時間だった。」

「そう。何でかしらねえ。」

属性。この世の人間は必ず持つべきもの。

専門的な魔法の属性は生まれたときから決まっている。

・・・が、俺はそれはどんな魔法機械をつかって調べても一切不明。町中の魔法の技術者を呼んで調べても、属性を調べる水晶は無色のままなのだ。

魔器は紅色の刀なので、火属性ではないかとの話しもあったが、火魔法がどんなにがんばってやり方を習得しても全然発動しない。つまり、火の属性ではないわけだ。

魔眼の属性がわからないのは、未だ誰にも分かっていない謎だった。

「ごめんくださーい！魔眼君いますかー！」

玄関から元気のいい声が聞こえてきた。みいの声だ。
母は「いつてきな」と促してくれて、魔眼はすぐさま玄関へと駆け
て行った。

「どうした？みい。」

「あっ、魔眼！ちょっと大変なの！」

自分の傘を持って、みいは魔眼に訴える。

表情から、どうやらただ事ではなさそうだ。

「うちの弟のウタがないの！お母さんが言うには、友達と遊びに
行ってその友達に先に家に帰っているんだけど、何かいやな予感が
して……」

魔眼も冷や汗がした。

この雨となったら、中々のものだ。山のほうでは土砂災害も多々あ
るだろう。

町の役員の魔法でどうにか被害は小さくはなっているものの、この
雨じゃ……

「よし、様子を見に行こう。」

俺は躊躇わずに傘たての傘に手をかけた。

「ウター！？どこにいるの！？返事して！」

傘を手にも、みいは雨の降る山のふもとの林を搜索していた。
みいの母親の話曰く、みいの弟はこの林に遊びに行ったらしい。
こりゃ早く見つけないと。焦りが見えてきたそのとき。

「おい、お前ら何やってんだ？こんなところで・・・」
「・・・またお前か」

2人の後ろで、シールドの魔法で雨を退けているテノーが居た。

「いや、ちょっと気分転換？wこれ、雨粒全然かからないから楽なんだぜ？w」

「俺らに喧嘩売ってんのか？」

「もうそんなことどうだっていいよ！てのっち手伝って！ウタが行方不明なの！」

「えっ！？；」

テノーもそれには驚愕した。

この雨の中でここにいたら地獄だとは幼少の頃林で遊んで夕立に降られては

風邪をひいていた彼が一番よく知っていたからだ。

「この林で降られた雨にぬれると1週間は余裕で動けなくなるってジンクスがあるぞ」

「それお前の場合な。ともかく探すぞ。」

「ok！俺も手伝うぜ！ちょっとまってろ」

シールドの中でテノーは耳に手を当て、眼を閉じる。

風属性のテノーが習得した風魔法だ。

テノーの耳に、風の音に混じって聞こえてくるいろんな音・・・

「・・・こっちだ!!」

テノーは走り出す。それに続いて魔眼とみいも後を追った。林の泥に足元がぬれるのもかまわず、3人は走った。

・・・数十分後。

「・・・ここだな」

テノーが聞いた風の音は、小さな稲荷の中から聞こえていた。

しかも、運の悪いことにその稲荷の裏には高さ何メートルもある断崖絶壁がたっている。

今にも崩れて土砂災害になりそうだ。

「すつげえところにいんな、お前の弟・・・」

「・・・全く、傘もってこないから・・・；それより、早く・・・」

みいが本堂に向かって石畳を駆け出そうとした瞬間。

「危ないっ!!」

めきめきと音を立てて崩れる針葉樹。

魔眼は身を挺してみいを引き戻して倒した。

それが始まりというように、そばにたっていた針葉樹は何本も倒れていく。

「そんな・・・な・・・」

みいは傘を落として目の前の光景を啞然と見た。

針葉樹が根元から倒れ、まるで稲荷に行くのを邪魔するように横倒れている。

しかも、その後ろからは、ただならぬ水の音が聞こえてくる。・・・

・間違いなく土石流だ。

このままでは、みいの弟どころか、3人もろとも巻き込まれてしまう。

「・・・くそっ！『カマイタチ』！」

テノーは自らの魔器、翠風刀を取り出し、目の前の針葉樹を風魔法で切り刻む。

斬られて木屑となった針葉樹の道を、すかさずみいは走り抜ける。本堂の扉が壊れて開かなくなっていたので、魔法の短距離瞬間移動で中に入った。

「姉さん！」

「ウタ！早く出るよ！！！」

ウタの手を引き、もう一度瞬間移動。そしてすぐさま稲荷の赤い鳥居を潜り抜ける。それに魔眼とテノーも続く。

しかし、少年少女たちの脚が土石流のスピードにかなうわけがない。土石流は先ほどもで居た稲荷を飲み込み、どんどん4人に迫る。

すると、くるっと魔眼が踵を返し、迫り来る土石流に立ちはだかった。

「魔眼！？」

テノーが走りながら後ろの魔眼を見た。

魔眼は自分の魔器、紅月花を取り出し、土石流に向かって突きつける。

そして、ぼそつと言。

「逆流」

魔眼の右目が紅く光る。

すると、土石流がその場で流れを変え、逆方向に向かって流れ出した。

しかもあろうことか崩れた崖を上ってそのまま見えなくなってしまった。

「ひゅー・・・すげ・・・」

「魔眼、いつあんなの覚えたの？」

「いや、基礎魔法を応用して編み出したオリジナル。属性授業がなに分こーうの発掘できるんだ。」

「あんた色々と才能あるわ。」

魔眼は紅月花をしまい、2人に説明した。

・・・その時、どこからともなく拍手が聞こえた。

「素晴らしい！」

拍手が聞こえたそこには、見知らぬ1人の男が立っていた。

雨の中、傘もささずただ黒いマントと黒いローブを着た、怪しげな風貌の男。

顔の全体がフードで隠れており、全く顔が分からない。

「あんた、誰？」

「僕の事はどうでも良いだろう。それより、今の一部始終見てたよ。いや、素晴らしい！」

こんな素晴らしい人材とこんなところで会えるなんて！しかも3人

も！」

男は魔眼の質問を軽く受け流し、3人をお世辞かと思うほどに褒めちぎった。

「君の風魔法のカマイタチ！大木をあれだけ細かく出来るのはそうそう出来ません。

あの瞬間移動も、正に光よりも速い！そして何よりあのオリジナルだという、逆流の魔法！

いやあ、いいものを見せてもらったよ。」

フードの男は深々と頷き、そして3人を1人ずつ握手してまわった。そして、3枚の赤い封をした黒い封筒を3人に1つずつ渡した。

「これは、いいものを見せてもらった僕からのお礼だ。家に帰ってじっくり見てほしい。・・・では。」

フードの男は勝手にさういふと、踵を返して林の奥深くに消えていった

「・・・なんだったんだろう、今の・・・」

弟の手を引いたままそれをもらったみたいが言った。

3人とも、その封筒をまじまじと見つめる。

その封筒は、特殊な魔法がかけられているらしく、雨に降られても乾いた紙の質を保っていた。

「・・・とりあえず、風邪引くから帰ろうぜ・・・」

テノ一のその一言で、3人（と1人）はそれぞれの帰路についた。

「・・・主。準備が整いました。」

1人の青年が、机の向こう側に座る一人の男に問いかけた。
男はブラインドを少し指にかけ、外を見た。

「・・・そっか。もう新学期か・・・早いね、1年も。」

「はい。」

「君は今年1年からやり直したっけ？・・・がんばってね、今年は面白い人材を見つけたんだ」

「・・・と、いいますと？」

男は振り返り、青年に向かって微笑んだ。

「・・・・・・・・まあ、君もすぐに会えるよ・・・・・・・・見ててごらん。」

男は静かに呟いた。

第三話 (Embarrassment and determination)

・・・男から、封筒を貰って1時間がたった。

家に帰ってきた俺はすぐさま2階にある自室へと駆け上がった。

そして、その封筒をいぶかしげに見つめ、赤い封を切った。

中には1枚の紙きれ。しかし紙の質はとてもいい。きっと高級なものなんだろう。

魔眼はその紙切れを恐る恐る開いた。達筆で書かれた文字が並ぶ。怪しいと思う反面、好奇心が抑えきれていなかった。

・・・しかし、そこに書かれていた文章を読みきった瞬間、驚きのあまりその紙を手にも自室を飛び出した。

「母さん母さん大変だぁー！！！！！！」

どたどたと階段を駆け下り、居間のドアをばんっと開ける。何事かと家族が皆居間に借り出された。

「どうしたの？魔眼？」

「どうしたもこうしたも、見てくれよ、これ！！！！」

母親をはじめ、祖母や父などもその紙をいっせいに見つめた

“ 紅刃 魔眼 様

この度、あなたは国立ハートロック魔法学園に入学を許可されました。

つきましては、入学の手続きをしますので、下のどちらかをマルで囲ってください。

国立ハートロック魔法学園に入学しますか？

YES

NO”

簡単な文章だったけれど、たちまち家族は総動員してパニックになった。

どこでこれを手に入れたのだの、一世一代の大事件だった。

とりあえず、1番最初に落ち着きを見せた父親が母と祖母を制した。

「まあまあ、母さんたち。確かにコレはすごいことだけど、魔眼はどう思うんだ？」

入学するのは俺たちじゃない。魔眼だ。これは魔眼が決める権利がある」

「父さん」

「お前の道だ。お前が決める。」

「……うん！」

魔眼はこつくりと頷いた。

「……そっか、お前もか……」

魔眼は携帯電話を手には隣の家のみに電話をかけていた。

『もう家族騒然。大パニックだよ。ま、これはまたとないチャンスだから、絶対のつかるけどね。』

「えっ、もう入学決めたのか？」

『当たり前じゃない。うちはこんな田舎に留まりたくないんだ。魔眼はどう？』

「俺は・・・正直迷ってる。」

『えっ、何でまた？』

電話からすつとんきょうな声が聞こえた。
みいは魔眼の答えが意外だったのだろう。

「・・・俺さ、属性分らないじゃんか。そんな俺が名門校、しかもかのハートロック魔法学園に入学するなんて思うと、気が引けて・・・」

『そっかあ。』

「母さんと婆ちゃんはもう両手を挙げての大賛成。父さんもまんざらじゃないけど、自分のことは自分で決めろ・・・って」

『ま、そこは人それぞれだからね。・・・そうだ、魔眼からてのっちへ電話してよ』

「・・・テノーに？」

電話の向こうでみいは「うん」と頷いた。

『この流れで行くと、多分てのっちの封筒の中身も一緒だよ。だから、それを確認してほしいの』

「・・・そっか。」

『・・・それに、5年前の4人での約束、忘れたとは言わせないよ』
「・・・！」

魔眼の顔がふつと揺らいた。

・・・思い出した。5年前、町の天空魔法列車の前で・・・

「・・・分かった。・・・電話してみる。」

そういつてみいとの電話を切った。

続いて、ケータイの電話帳を開き、テノーの番号を選択する。

電話を耳にあてコール音を聞いた後、いつものテノーの声が聞こえた。

「俺だ、魔眼だ。」

『もしもーしっと、おお、魔眼かぁ！その様子だとお前もあの封筒の中身、アレだったのか？ハートロックの入学許可証！』

「大当たりだ。そうか、お前もか・・・」

『もう家族騒然だぜ。大パニックさ。でもこれはまたとないチャンスだし、絶対のっかってやる！』

・・・どこかで聞いたフレーズだ。

「・・・やっぱあれか・・・黒のことか。」

『あたりめーよ！くろちゃんにやっと会えるんだよオオオオオ！！』

こいつが変態なのは今更だ。とくに5年前に別れた黒天使・・・
黒天使 芙蓉には特に引っ付きまわっていた。

5年前、黒が10歳のとき、俺らの今の魔法学校が黒をハートロック魔法学園へ推薦した。

確かにその時のあいつはすごかった。基礎魔法は全てコンプリートしてたし、

あいつは闇属性だったのだが、上級魔法を1つ2つ覚えていた。

若干10歳でそれだけすごい魔法生徒だったから、当然ハートロックス魔法学園は受け入れた。

今の俺らのレベルでも到底追いつかないのだが、あいつは本当に天才的な才能を持っていた。

『やっと約束が果たせるんだ！もう絶対行くしかないって感じでよ！』

「……そっか。実は俺、迷ってるんだ。約束の話抜きで、さ」
『え？』

「俺、属性分からないじゃんか、だから、俺みたいな奴があんな有名校に行っても浮かないかな……って」

テノーは一拍おいて、こう答えた

『馬鹿だな、お前。逆にチャンスじゃんか！田舎では分からないことでも、あそこに行けば……ハートロックス魔法学園に行けば、お前の属性だって何だって、きっと分かるって！！』

「！」

魔眼にとって、その答えは衝撃だった。

『田舎と都会じゃ、技術の差は桁違いだ。確かに駄目かもしれない、けど見つけるんだよ。それに……俺、お前やみいと一緒にあの学園に行きたいんだ。』

「……テノー……」

魔眼の口の端に、笑みが現れた。

「……そうだな。俺も決めた。」

そして、さよならを言って通話を切った。

魔眼は自分の机に向かい、先ほどの紙を取り出した。
そして、ペンで『YES』に丸をつけた。

そして、今までの文字が消えて、そこにはまた新しい文字が浮かんだ

“紅刃 魔眼様の入学を確定しました。

つきましては、こちらの教材をお持ちになった上、

4月2日に天空魔法列車にてお越し下さい。

なお、教材のお金はこちらが全負担いたします。”

という文章と、下のほうには小切手が加えられていた。

4月2日、早朝。

天空魔法列車の駅の前には、5年前、黒天使が行ったときのように、3人の両親家族は勿論、町の魔法技術者、魔法医、魔法学校のたった4人の教師、友達から知らない人まで町の住民全員が駅の入り口前に集まっていた。

「黒野さんに続いて、君たちは本当にすごい偉業を成し遂げてくれました。君たちはこの町の誇りです。」

ちよびひげの中年まっしぐらな町長が3人の手を1人ずつしっかりと握った。

ハートロック魔法学園の黒の制服を着た3人はまるで偉大な魔導師のようだ、と人々は口にする

「田舎では学べない魔法を、思いっきり魔法を習得してきてください。話を聞かせてくれるのを、楽しみにしていますぞ」

学校の校長先生が言う。

「・・・それじゃ・・・行ってきます!!」

3人は故郷の風に送られながら、

天空魔法列車に乗り込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0328w/>

ハートロック魔法戦記

2011年10月9日14時19分発行